

講演

盆踊りの場にあふれる若者の性の力

京都市立芸術大学 吉川 周平

1. はじめに

今大会のテーマは《ダンスと若者文化》だが、現在日本で非常に流行し、注目されている舞踊に、高知市で1954年によさこい（鳴子）踊りとして創始されたものと、1992年に札幌市で創始されたYOSAKOIソーラン祭りの踊りや、沖縄のエイサーがある。これらの舞踊は、若者たちの心を捉え、日本の各地に波及している。YOSAKOIソーランの踊りは、高知のよさこい踊りを発展させたものだが、エイサーを含めたこの3種の舞踊は、若者以外の人間が参加していても、若者が中心にある集団舞踊であることは間違いない。

エイサーは大阪など各地に広まり、本拠地の沖縄においても変化しているが、もとは盆に行われる芸能であった。高知のよさこい踊りは、隣県の徳島市の阿波踊りが日本でもっとも活性化された盆踊りで、多くの観光客を引き寄せているのを羨み、商店街を活性化するために創始されたものである。高知市には阿波踊りが持つ魅力に対抗できる盆踊りがなかったため、踊り手が鳴子を鳴らすなど、これまでの盆踊りの枠を破ったことが爆発的に歓迎されて発展したが、集团的に素人が踊る点で、踊りとの関連は無視できない。というのは、日本の伝統舞踊は、職業的に芸能を行ってきた人たちによる一人または少数の人による芸術舞踊と、一般の人たちが集团的に行う民俗舞踊に大別されるが、後者のなかで誰でも参加でき毎年行われてきたものは、盆踊りしかないからである。つまり、よさこい踊りがどんなに盆踊りから断絶しているように見えても、盆踊りがなければ、さらには阿波踊りの存在がなければ、よさこい踊りが生み出されることはなかったと思われる。

よさこい踊りやYOSAKOIソーラン踊りは、生まれて間もないが、盆踊りの起源は不明であり、長い歴史のうえで変化している部分も大きい。とくに、現在の盆踊りは、風紀紊乱を理由に、明治以降は官憲の取り締まりによって、性的な刺激を持った魅力が失われてしまったばかりではなく、少子高齢化と若者の都会への流失により、盆踊りの場にあった、若い男女が集い競う青春のエネルギーの汪溢は、ほとんどの所で失われてしまっている。しかし、日本の盆踊りの舞踊としてかたちを考え、盆踊りの目的の変質を考え、その場の主役であった若者に舞踊を行わせる性のエネルギー

について、あらためて検討してみることは必要であろう。

2. 私の研究の立場と方法

私は早稲田大学の、小寺融吉、本田安次、郡司正勝といった民俗芸能や舞踊を対象としてきた研究者と、民族音楽学の小泉文夫の研究から学んでいる。

日本の民俗芸能を研究する立場からは、よさこい踊りや、YOSAKOIソーラン祭りの踊りは、盆踊りとの深い繋がりを考えないわけにはいかない。小泉文夫は日本の伝統音楽を分析するときに、歌詞などの音楽以外の要素を取り除いて、音そのものを研究対象として、日本の伝統音楽の基本的な構造を解明するのに成功した。

私は、日本の伝統舞踊を分析するのに、身体の意志的な動作ばかりではなく、無意識や反意志的におこる身体の痙攣などの変化を含むウゴキそのものを対象として考察している。さらに言うところ、こうした立場と方法から、私は盆踊りの調査で、足を左右左右と交互に動かす歩行の動作とはまったく異なる動作をさす、ボンアシという言葉を発見した。小泉の研究は、日本の伝統音楽を三つに分けて、芸術音楽の基盤に民謡があり、その民謡の基盤にはわらべ歌があると位置づけて、もっとも基本になるわらべ歌の分析によって、日本の伝統音楽の基本構造を解明した。私は日本の伝統舞踊において、わらべ歌に相当するのは盆踊りだと考える。そして、小泉と同様にもっとも基本をなすものの分析によって、芸術的に高度な舞踊の構造の解明もできると予想していたが、歌舞伎舞踊（もとの名称は、かぶきおどり）のなかで重要な要素とされてきたオスベリが、ボンアシに対応する技法だと発見した。つまり、ボンアシが同じ足を二回ずつ動かすときに、前方に向かって、左左、右右と動かすのに対し、オスベリは逆方向の、後方に左足をすべらせてから前を踏み、右足を後ろにすべらせてから前を踏むという動作をする。そして、踊りの動作は跳躍と考えられているが、盆踊りも歌舞伎舞踊も跳び上がる垂直の動作を、跳び上がらずに水平運動化していても、ボンアシとオスベリが、跳び上がらない踊りの技法の核になる動作であることが解明できたのである。

3. よさこい踊りやYOSAKOIソーラン祭り系の踊りと阿波踊り

昨日の《ダンスシーンからみた若者文化》のシンポジウムでの発言と映像は、学校教育におけるダンスの延長線上にある舞踊のように思われた。それに対して、よさこい踊りやYOSAKOIソーラン祭りの踊りは、技法的にはその影響を強く受けているにしても、地域社会による教育である民俗芸能の一種としての、盆踊りとの繋がりを考えないわけにはいかない。

札幌のYOSAKOIソーラン祭りは、高知のよさこい踊りの隆盛をみて、同じようにさかんな踊りを催したいということから始められたものだから、まずよさこい踊りと盆踊りのなかでもっとも発展している阿波踊りとを比較してみよう。

はじめに、同じ点は次のようなものである。

- ①踊り手は、原則的には誰でも参加できる。
- ②踊りは集団が一組になって踊りの効果をあげるために、地縁ではなく志を一つにする連を作る。
- ③それぞれの連は専用の音楽隊を持つ。
- ④ストリート・パフォーマンスである。
- ⑤よさこい踊りほどではないが、阿波踊りも高円寺の阿波踊りなど他地域でも行われている。
- ⑥観光客を多く集めたがっている。
- ⑦そのため、阿波踊りは盆の時期に行っているが、行う日数を増大させたいという意見が常にある。よさこい踊りは、徳島の阿波踊りと正面からぶつからない日を選んで始めており、盆という時期の制約は初めからもたない。YOSAKOIソーラン祭りではその傾向がさらに強い。
- ⑧若さが引き立つような舞踊が好まれる。
- ⑨踊り手は、若者が目立つ。
- ⑩踊りの振り付けに新しいものが求められている。
- ⑪死者のために踊るということはない。
- ⑫踊りは見物人によく見られることを目的とし、踊り手はその評価を気にする。

以上のような共通点を挙げることができるが、それは盆踊りという枠のなかでも、徳島の阿波踊りは時代と共に変化してきたからであり、高知のよさこい踊りは当事者は知覚していなかったとしても、盆踊りの発展上から生み出されたものと認められよう。

しかし、最大の相違点は、よさこい踊りが盆という時期の制約から脱出したのに対し、徳島の阿波踊りは、盆の時期に踊るということを守っていることである。

4. 新春の松拍(まつばやし)と盆の念仏の拍物

現代は、人間はいつでも集団的に踊ることができるが、一般の人たちが集団的に芸能を行った時期は限定されていた。室町時代初期には、松をはやすという芸能の松拍は正月を中心とする新春に

行われ、盆の時期には念仏を唱えてはやすという念仏の拍物が行われたように、芸能の素人が芸能を演じる機会は限定されていた。近代になっても、昔は1月と7月の16日以外は仕事を休めなかった体験を、大分県の姫島の盆踊りの調査の時に聞いたことがあるが、盆と正月は素人が芸能を行う二大シーズンであった。

とくに、旧暦の盆の7月15日は、海は大潮で空には満月という踊るには絶好の自然環境があった。姫島の盆踊りは島内を移動して行って踊るが、昭和43年(1968)には旧暦で踊るのを見て、旧盆に踊る気持ちがよくわかった。しかし、その後間もなく島内に水銀灯がつくようになって、新暦の月遅れに変わったが、同時にテレビも普及して、盆踊りはつまらないと、踊る者が少なくなり、すっかりさびれた時期がある。

5. いわゆる盆踊りと盆に踊ることによる盆踊り

盆踊りと言われる舞踊には、2種類ある。ひとつはいわゆる盆踊りで、圧倒的多数のものがこれで、1曲は一連の動作のフレーズの繰返しで構成されているものである。もう一つは、静岡県徳山の盆踊りのように、盆には踊ることが一般的になったために、盆に踊る踊りという意味で言われる盆踊りで、盆の踊りと言うべきものである。対馬の盆踊りもその一つであるが、この盆の踊りは、見せる要素が強く、1曲には一連の動作のフレーズが複数あることと、踊り手は選抜され限定されていることに特色がある。徳山の盆踊りは少女たちの、対馬の盆踊りは青年たちによるもので、1曲を長時間踊ることができるいわゆる盆踊りと異なり、決まった歌詞を歌い終わると踊りを止める、比較的短時間で終了するものである。また、この種の盆踊りは、曲の間に滑稽な言葉や動作による狂言を演じることがあるのが特徴である。

6. いわゆる盆踊りの目的と若者の性の力

いわゆる盆踊りを以下は盆踊りと称し、盆に踊られることによる盆踊りを盆の踊りとして区別したいが、本稿の「4」までに述べたのは、いわゆる盆踊りである。

盆踊りの起源は不明であり、室町時代の念仏の拍物との関係も不明である。

しかし、近年明らかになった盆踊りで、初盆の死者の位牌を背負って踊るものが、瀬戸内海の香川県坂出市の与島と櫃石島や、愛媛県の大三島や岡山県の倉敷市下津井などで行われている。これらの盆踊りの目的は、肉体の葬式から取り残されている初盆を迎えた死者の霊を、近親者が背負って踊ることによって、あの世に送り届けることであることを物語っているように考えられる。

3世紀に成立したと考えられている『魏志』倭

人伝には、人が死んだとき、10日あまり肉を食わず、喪主は大声をあげて泣き、他の人たちは、「歌舞飲酒」すると書いてある。現在の日本の葬式は、死後24時間経過したら火葬できるが、お通夜で飲酒することはあっても、誰も歌舞することはない。

与島の盆踊りでは、死後49日が過ぎて初盆を迎えた人たちだけの位牌を盆踊りの場に持参して背負い、太鼓の音に合わせて、死者の姓や名前をいう歌を歌って踊りが踊られる。他所ではこうした特別な詞章はないが、口説などの盆踊りや歌によって、位牌を背負った人達が踊っている。

位牌は死者の霊を具体的に視覚化したものであるが、長野県の阿南町新野の盆踊りでは、数日踊る盆踊りの最後の日である新暦8月16日の夜には、初盆の人の霊をあらわす切子灯籠を持参して、夜明けまで踊り続けて地域の境界まで行き、夜明けとともに、修験者が切子灯籠に切りつけて点火し、空砲が一発天に向けて打たれるのを合図に、一同は後ろを振り向かずして走って帰る。もし振り向けば、踊り神が憑いて、その次の盆まで踊り続けさせられるというのである。

盆踊りは、大分県の姫島でも夜明けまで踊っていたが、現在では近所の人に対して騒音になるからといって、午後10時ごろに止める所がほとんどである。しかし、盆踊りは夜明けまで踊り続けて、夜明けとともに止めるというのは、夜活動する霊との密接な関わりを物語っていると考えられる。

さて、1981年に韓国のソウルに行ったとき、国立劇場の地下で、模倣的に上演された全羅南道珍島のタシラギという葬儀の儀礼を見た。死者の棺が置かれている前で、巫覡たちは歌舞をし、人形だが赤子を取りあげることまで演じたのである。これには驚いたが、私は『魏志』倭人伝の死者の儀礼の歌舞の記事を思いだされ、死と闘うには、歌舞飲酒と生むことなのだと考えさせられた。この赤子は盲人が連れていた若い娘の淫らの結果なのである。

官憲が取り締まったのは盆踊りの風紀紊乱が理由だとされるが、盆踊りにおいては、性の解放が黙認されていたとよく言われる。『魏志』倭人伝には倭人について「其風俗不淫」とあるが、盆踊りにそうしたことが許されていたとしたら、盆踊りが生と死の相克の儀礼であったからとも考えられよう。少なくとも、警察官が一人しか居らず、官憲の取り締まりにあわなかった大分県の姫島の盆踊りでは、ゲサクな踊りが好まれているが、エロティックな趣向や動作や声を見聞きでき、他所では失われてしまった浮き立つ気分が残っている。

性の解放といっても、実際にするというのではなく、そこまで及んでも許されるということが、盆踊りに解放感を与えてきたのであろう。少なく

とも、現在は若者が少なくなったが、盆踊りの場の主役は若い男女であり、性すら解放されているという枠組みのなかで、盆踊りの活気が生まれていたのだと思われる。少なくとも盆踊りの場は、若い男女が心ときめかして集い踊ることによって、肉体の葬式では覆いかぶさっていた悲しみを超克して、笑いさえ起こして、死を追い払い、生気を完全に取り戻すことができるのである。

よさこい踊りやYOSAKOIソーラン祭りは、男女の性の乱れを起こさないようにしているというが、盆踊りという宗教儀礼においては、それを抑圧してはならなかったのであろう。

<付記>本稿は、第55回舞踊学会大会の基調講演②《盆踊りの場にあふれる若者の性の力》を改稿したものである。

<参考文献>

吉川周平

- 1967, 「松拍考」(上), 「演劇学」8。
- 1969, 「松拍考」(下), 「演劇学」10。
- 1970, 「『舞踊』の語と舞踊研究史」, 『日本の古典芸能』6 『舞踊』, 平凡社。
- 1975, 「姫島の盆踊り-風流と盆踊との研究の手がかりとして-」, 「演劇研究」7。
- 1979, 「民俗舞踊の芸態」, 『講座日本の民俗』8, 有精堂。
- 1984, 「姫島の盆踊りに見られる生と死の葛藤」, 「国学院雑誌」85-11。
- 1986, 「民俗芸能の一研究-動きを視点として-」, 『諸民族の音-小泉文夫先生追悼論文集』, 音楽之友社。
- 1987, 「<オスベリ>-歌舞伎舞踊における<オドリ>の核動作-」, 「舞踊学」10。
- 1989, 「日本舞踊の理論-舞踊の要素、構造、動作の分析-」, 『日本の音楽・アジアの音楽』5, 岩波書店。
- 1997, 「ボンアシー盆踊りにおける足の運びが意味すること-」, 『体育の科学』47-48。
- 1998, 『香川県の民俗芸能-平成八・九年度香川県民俗芸能緊急調査報告書』(共著), 瀬戸内海歴史民俗資料館。
- 1999, 「身体動作の構造による盆踊りの二大別-飯山町の盆踊り・シカシカ踊りと対馬の盆踊り-」, 「舞踊学」22。
- 2000, 「死霊の葬儀儀礼としての盆踊り-その身体動作のかたちと意味」, 『民族芸術』16。
- 2002, 「小泉文夫による日本伝統音楽の研究対象の三分類と『民俗芸能』・『盆踊り』の再検討」, 『民族音楽学の課題と方法』, 世界思想社。

小泉文夫

- 1958, 『日本伝統音楽の研究』, 音楽之友社。